

博物館 Dictionary No.245

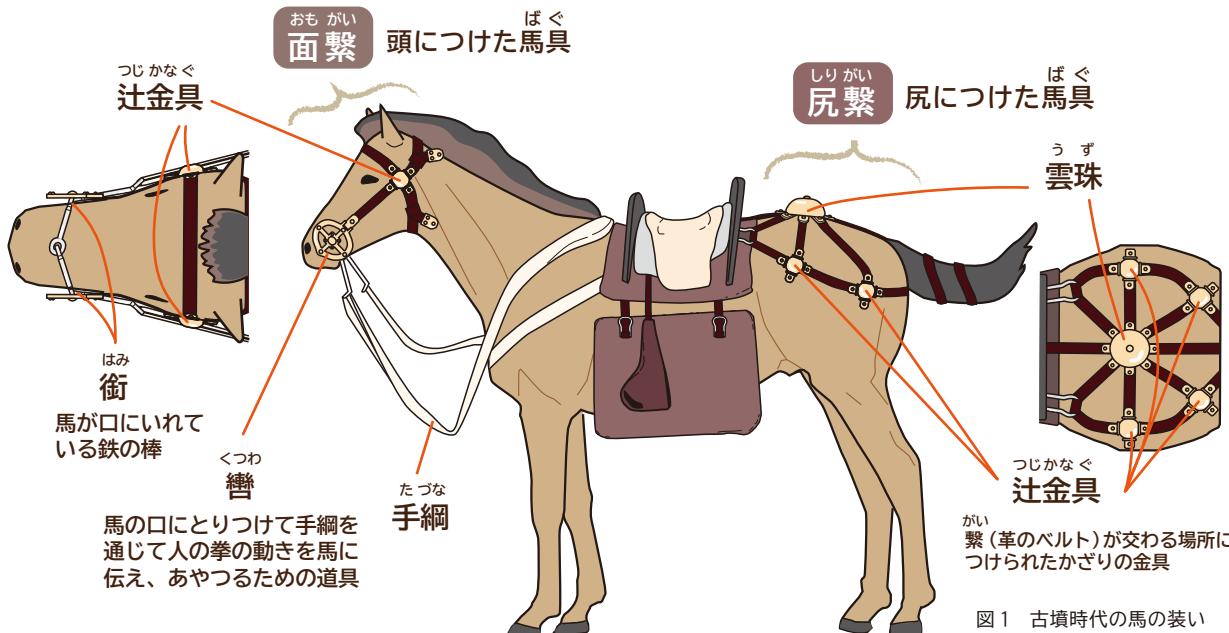
～あなたに語る・時代を超えて生きる心～
てんじ
展示中の作品について、研究員がわかりやすく解説します。
かいせつ

こ ふんじ だい ば ぐ 古墳時代の馬と馬具

日本に馬がくるまで

みなさんは、人がどこで、いつから馬を飼いはじめたのか知っていますか。最初に馬を飼っていた人々は、今から約5000～6000年前、日本のはるか西にある中央アジア・カザフスタンの草原地帯にいたと考えられています。そこでは、衡と呼ばれる馬具が発見されています。衡とは、馬の口にかませて手綱を通じて人の拳の動きを伝え、馬を操るための道具です(図1)。車でたとえるなら、ハンドルやブレーキの役割を果たすものです。動きの速い馬をうまく操り、飼いならすためには、このような道具が欠かせません。つまり、衡の発明こそが、人類の「馬を飼う歴史」の始まりだったのです。

こうして生まれた馬を飼う技術は、やがて東アジア一帯に広りました。しかし、周りを海に囲まれた日本にこの技術が伝わったのは、今から1500年前、古墳時代中期(5世紀)のことです。当時、中国や朝鮮半島では戦いが絶えず起こっており、人々は勝利を求めて、馬の速さと力を武器として使うようになりました。日本の人々もこのような様子を見て、「自分たちも馬がほしい」と考えました。そこで当時の日本の王(倭王)は、朝鮮半島から馬や馬の飼育に詳しい人々を招き入れたのです。近畿には、王が招いた人々を住まわせ、馬を飼育していた牧場がありました。大阪府四条畷市にある藤原北遺跡がそのひとつです。この遺跡からは、馬のお墓や、子馬のトレーニングに使われた馬具、馬が塩分を補給するための塩を入れた土のうつわなどが見つかっています。



力のしるしとしての馬具

古墳時代の偉い人たちは、自分の力を示すために、大きなお墓(古墳)をつくりました。

そこには豪華な品々をおさめましたが、馬具もそのひとつとしてよく入れられました。

当時、馬を飼うことができるのは限られた少しの人だけでした。だからこそ、馬や馬

具を持つことは、その人が偉い立場にあるというしにもなったのです。京都府福

知山市の弁財1号墳といいうお墓から見つかった馬具もその例です。このお墓には、轡・

雲珠・辻金具といった馬具がおさめられています(図2)。どれも金色に輝いていますね。

これは「こんなに立派な馬具を持っているぞ」とまわりにアピールするため、わざと
はなやかに作られたのです。

しかし、実際にはすべて金で作られていたわけではありません。鉄の板に、金メッ
キした銅の板を貼り合わせて作られていました。このような作り方を「鉄地金銅張」
といいます。すべてを金で作るのではなく、鉄や銅を組み合わせることで、当時まだ
貴重だった金属を節約していたのです。古代の人々の知恵が感じられますね。

ところが古墳時代から飛鳥時代へと時代がうつると、仏教が広まることにより、
偉い人たちは、古墳にかわって寺院づくりなどに力を入れるようになりました。それ
にともない、自分の力を見せつけるために、お墓に豪華な品物を入れることが少なく
なりました。そのため、きれいに飾られた馬具もやがて作られなくなっていました。

鏡板付轡



雲珠



辻金具



図2 京都府福知山市弁財1号墳から出土した馬具 古墳時代後期（6～7世紀）京都国立博物館蔵

(考古室 繩納民之)